

熊本大学学術リポジトリ

Kumamoto University Repository System

Title	復讐（エミール、ゾラ作）：小説
Author(s)	島，隼人
Citation	龍南會雜誌， 1 5 7： 5 5 - 9 2
Issue date	1915-03-30
Type	Departmental Bulletin Paper
URL	http://hdl.handle.net/2298/6437
Right	

復讐

エミール、ゾラ 作
島 準 人 譯

人物

ローラン (Laurent.)

グリヴェー (Grivet.)

ラカン夫人 (Madame Raquin.)

シユザンヌ (Suzanne)

カミーユ (Camille.)

ミシヨール (Michaud.)

テレーズ、ラカール (Therese Raquin.)

場所

パリ

時代

現代

——左右は俳優から見えて——

第 壹 幕

この幕の間、常に大きな居室、室は寢室にも食堂にも使はれて、高く暗く埃ぼく、壁紙なども色褪せて居る。家具は粗末で一樣でない。此所彼所に、何か入った厚紙の箱や帽子箱が置かれてある。中央に屏。その右手に戸棚、左に算笥、更に右手前方に、寢臺と窓の附いた寢室がある。窓からは裸婦が見下される。更にすつと右手前によつて小さな屏があり、その前面に仕事卓と椅子とがある。左手、算笥と暖爐との間に店へ下る螺旋梯子の欄干が見られる。左前より暖爐がある。その上蓋の上に置時計と造花を挿した二つの花瓶。暖爐の上の方には姿見が掛つて居て、その兩側に小さな枠に入つた寫眞がある、室の中央に油布で蓋は

れた大な圓い卓、その下に木製の足臺。別に青と緑と二色の安樂椅子。多くの椅子。中央の卓は猶ほ蓋はれたまゝ、寢室の窓は半ば開かたれまゝである。総てに大いなる平靜と安易さが現はれて居る。

夏の暮。八時。食後。

第壹場

ローレン、 テレーズ、 ラカン。 ラカン夫人。 カミーユ。

カミーユ。(自分を描いて貰ふために左方の安樂椅子に腰を掛けて居る。流行遇れのプロックコートを着て窮屈相にして居る)

ローラン。(右手窓の前の畫架に對つて、立ちながら描いて居る)

テレーズ。(ローランの傍の低い椅子に蹲つて俯きながら、肘を膝に顔を支へて夢みて居る)

カラン夫人。(中央の卓の蓋いを取つて居る)

カミーユ。(些と躊躇つた後)物を言つても可いかい。邪魔にならないかね。

ローラン、いや些ども、身體さへ動かさなきや

カミーユ。僕は何だよ、晩飯を食た後で話をしないで寝ちまうんだ。君は幸と身体が壯健だから、何だつて

堪へられるがね。僕は練乳酪を二度食つても不可つたんだ。處が彼を食はずにや居られない。僕の胃はからきい駄目だよ。(間)君、クリームは好きかい。

ローラン。好きどころか——甘い上等のなら勿論だよ。

カミーユ。君の甘好きは、當家ぢや熟く知れてるよ。あの練乳酪はね、特に君にといふんで作へたんだ。僕の口には、なんと合はないんだがね。お母様は君をちやほやし過るよ。然ぢやないかテレーズ、お母様はローラン君をちやほやし過ざるね。

テレーズ。(頭を上げないで)わー

夫人(幾枚かの皿を抱へて、中央の卓の蓋ひを取りつけながら)彼等の言ふことを御聞きになるのやたまへんで、ローラン様。カミリヨがな、私にヴァニレよりか煉乳酪の方が御好きや言ふたんだつせ。それからな、砂糖をもつと入れやうとしたのがテレーズだつせ。

カミュー。それや自分勝手が好きですよ、お母様。

夫人。へ、私が自分勝手が好すぎると(中央の扇を出て行く)

カミュー。(室を去るカン夫人に)わ、わ、然うですよ。(ローランに)お母様は君が好きなんさ、矢張りVernon

の者だからね。臆わてるかい君、僕等が未だ幼きかつた時分、お母様がよく金銭を呉れたね。

ローラン。君はそれで、よく林檎を買つたものだつたな。

カミュー。それから君は小さなナイフをね。あゝ僕等が巴利で再た會ふなんて何て運がいいんだらう。もう僕は退屈をしないぞ。以前にはね、實に言ひしらの倦怠を感じたものだ。僕が夕方、役所から歸つて来る、すると此家は寂漠と幽鬱の住家なんさ。(問)未だ充分に見るかい。

ローラン。うん大して暗くも無い。もう直ぐに終ひだ。

カミュー。もう直ぐ八時だらう(問)夏の夕暮は長いね。戶外で描いて貰つた方がよかつたな。その方がずっと感じがよかつたらうよ。今描いてる灰色の背景のかはりに、多分美しい景色の中へ僕が描けたらうからね、わ。だが朝は咖啡を飲んで役所へ駆けつける時間すら危しいんだからな。君、まあ話し給へ(問)まつたく消化に良くないよ。飯を食つた後、こんなに堅くなつて靜然坐つて居るのは。わ、然うぢやない

か。

ローラン。まあ、そうして居て呉れ給へ、それで終ひなんだから

夫人。(再び中央の扇から入つて来る。中央の卓の蓋ひを全り取去つて拭き清める)

カミーユ。それから——君、朝だつたら君も、つと光線がよく取れたんだがね。成程、此處ちや太陽は見られないがね、向ひの塀に日光が照るもんだがら、此室も明るくなるんだよ。眞實こんな家を借るなんて
に母様の佳い思付き。雨の附る日なんか宛然害だ。

ローラン。でも——商人が恰度、商買のある處に居るつて譯だから、商買するにはいい所だよ。

カミーユ。それには僕も何も反對はしないさ。店は素敵によく出来てるし、女達も喜んで居るからね。僕は
——僕は商買は好きぢやないが。

ローラン。だつて住居だつて居心地がいいぢやないか。

カミーユ。まあ左様言つて呉れ給ふな、其處に。僕等が寝たり食べたりする此の室を除けちや、に母様の小さな部屋があるばかりなんだから。臺所などは話にもならないのだ。小さい狭い洞穴さ。その小さいことつたら身動きもならぬ程だ。どの戸も何の窓も、満足に閉る奴つたら無いんだしね。だから何處も彼處も、隙間みたいに風が通るんだ。殊に夜は、其所の段椅子へ行くところの小さい戸からね(右手前よりの小さな扉を指す)

夫人(既に中央の卓の蓋ひを全く取去つて居る)カミリヨ、お前は何にでも見で可い言ふたことは無いで。私はな、其性質を匿さう思ふたんや。それで最初、お前が唯一人、巴利で官員様になつて暮さうとわしだつた時、

私は私で Vernon で小さい店を開いて行かゝとしたんやつた。しかした前が從妹のユノレーズと結婚を
たしだつたとき、仕方なしに私も亦、Vernon を見捨てゝた前達を此地で世話することにしたんや。今は
それ處か考へて見たら好い、金錢を儲ける思案をせんならんのやないか。小さいのが出來んとも限らん
のに。

カミーユ。や成程な、僕は又巴利ちや明るい廣い賑かな街に住むことだどばかり想つて居た。そうなたら
窓の内側に寝そべつて美しい馬車の通るのを飽かず視て居られると想つたんだ。僕は其奴が氣に入つ
たんだがな。處がさ——此家ちや窓を開けると、眼の前には大きな塀があるしさ、眼の下にや便所のガ
ラス屋根が見ゆるつて始末だ。塀は燻んだ顔をしてやがるし、ガラス屋根は鳥の糞と蜘蛛の巢で汚く穢
れてやがる。Vernon ぢや君、セイヌ河が始終流れて、他のものは年中、ま倦きくするやうな景色ばつ
かりだつたけれど、此地よりか何程いいか知れやしない。

夫人。私もほんまにた前と歸らうと思ふたがいな。

カミーユ。所が有難い。今ぢやローラン君といふ人を發見たからな。僕は左様、夜だけしきや家には居ない
んだから——孰らでも可いやうなもんだ。家が濕ばからうが、濕ばくなくからうが——た母様らさへ好い
のならね。

夫人。そない解つたんやつたら、もう今後は家のことを何も嘸々言うて困らさんやうにしてた呉れ。

(左方、下の店で鈴が鳴る)

誰や店へた見わたで、テレーズ。降りてけへんの。

テレーズ。(開けぬ風をして動かずに居る)

夫人。仕様がないで。自分で行くわいな(左手、螺旋梯子を店へ降りて行く)

第二場

ローラン。 テレーズ。 カミーユ。

カミーユ。何も母様を困らしたくはないさ。しかしこの家ぢや眞實堪らんからね。僕は始終心配してんだよ。普通の些とした風邪を引くとするね、それから肺炎か何かに罹つてさ、そのまゝに陀佛となりはしないかと思つて——僕は、君達のやうに、さう健康ぢやないからね(間)ちよいと君、如何だらう暫く憩まして呉れては、僕は、もう全く肩が凝つちまつたんだ。

ローラン。そんなに憩みたけれや——休んでも可い。仕上げは、その後で直ぐ終ふから。

カミーユ。よし来た。これで少々歩き廻れるか——僕は最早この上、坐り続けることは出来ないよ(あちこち歩廻つてテレーズに近づく)なあお前、俺には妻君が什うして好く斯う何時間もく坐つて居られるのか解らない。手一本だつて動かすんぢやなしさ。何時見てもく凝乎と考込んで居る。俺なんざ見たけでも身体が瘦せるよ。お前には左様ぢやないんかな。ローラン君、君は何ともないのかい。此女が化石みたいに傍に蹲つてゐる。まあテレーズ、些とだけで可いから動いて呉れよ。啞者の眞似をするのが、お前前の洒落なんかい。

テレーズ。(矢張り動かずに)わゝ。

カミーユ。そうか、ぢや澤山に楽しみなさいました——牧場の牛みたいにお前が、相手を慕ふたつて俺は些

とも關はない。お前の父の Decans 大尉がそら、お前を母様の處へ連れて來た時分には、もう大きな黒い眼をして居てね、何時も俺を凝乎と瞷めくしたもので、俺はその度、必つて恐くなつたものだ。それに、あの大尉の恐なかつたこと。あの人はアフリカで死んで、もうあれから Vernon へは來なかつたんだね。わ、テレーズ。

テレーズ。(矢張り動かずに)わ。

カミーユ。どうか物を言過ぎて舌を毀さんやうに(彼女に接吻をする)今言つたことを氣に掛けるんぢやないぜ。お前は猶且好い女だ。俺達は、お母様が結婚させて呉れてから、一度だつて喧嘩なぞしなかつたぢやないか。怒つてゐるのかい。

テレーズ。いゝね。

ローラン。(支手棒でカミーユの肩を敲く)彼方へ、カミーユ君、もう十分だけ君が必要なんだ。

カミーユ。(坐る)

ローラン。頭を、もつと左へ——そう、それで好し——動いちや不可よ。

カミーユ。(暫く經つて)君——お父様は一體何をして居られるんだ。便でもあるかい。

ローラン。親爺は僕を忘れて終つたよ。それに、僕も些ども手紙を遣らないんだ。

カミーユ。變な人間だな。父と子で居て手紙の遣取りもしないなんて、僕なぞ眞似も出來ん。

ローラン。そう言ふのかい、君は。一體、親爺が頑固なんだよ。何でもかんでも僕を辨護士にして、自分が始終近所の者と軋轢する事件の訴訟をさせやうと思つたんだ。處が僕が學資金を全部、繪の稽古に使

つてたらう。そいつを親爺が知つたもんだから、早速送金を止めて了つて、それから最早二度と金を送つては呉れないんだ。でも如何したつて辨護士になんか成るものか——糞面白くもない。

カミーユ。でも君のため只だ良かれがしと思はれたんだよ。敏活奴は辨護士になつて、随分金を儲けるからね。

ローラン。或は然うかも知れぬ。處が、そうしてる中、ふと同窓の奴に逢つたんだね。妙なもので其奴が畫家になつて居たものだから、僕も遂に畫家になることに定めて終つたんだ。

カミーユ。その時君は、それで踏止つて勉りや好かつたんだ。そうすれや今頃は、恐らく有名な大美術家になつてたうらうに。

ローラン。仕うして、あの時分には、下手に行くゝと餓死する所だつた。仕方がないから繪の方も棚へ上げてしまつて、些とした職を搜したんだよ。

カミーユ。ぢや君は、その時分描畫をしつから稽古したんだね。

ローラン。うん、滿更捨てたもんでもないんだ。以前にはね、畫家生活が甚く氣に入つてたもんだ。——汝が欲するまゝに行ひ得なば、これ常に汝自身の主人たる也か。僕が役所に入つた當座は、如何に畫室を戀ひ焦れたうらう——あゝ。畫室にはソファアがあつてね、その上で何日半日位は夢見て暮らしたものだ。それに又——だが、僕等は素敵な繪を描上げたものだよ。

カミーユ。ぢやモデルまでも置いてたのかい。

ローラン。無論さ。それや眞實素敵な金髪の娘だつた。

テレーズ。(やゝ身を起こして、左手に行き螺旋梯子を通つて店へ下る)

ローラン。ねねカミーユ君。どうやら僕等が妻君を逐ひやつたやうだね。

カミーユ。妻が僕等の話に注意して居たと思ふのかい。心配御無用だ。生來可哀さうな女で、何一つ解らないのだ。尤も僕が病つてる時には、よく介抱して呉るがね。あれはた母様に教はつたに違ひないんだ。

ローラン。妻君は什うも僕を好いて居ないらしい。

カミーユ。何だ、女みたやうに。——未だ濟まないのかい。

ローラン。うん、立上つても可いよ、今こそ。

カミーユ。(立上つて肖像畫に近寄りながら) 濟んだのかい。本當に全部。

ローラン。唯だ額縁が足りないだけだ。

カミーユ。好く出来たね、ね(急いで左手、螺旋梯子の胸壁に近寄り店に向うて呼ぶ) た母様、テレーズ、ちよつと來て見て御覽。ローラン君が描上げたから。

夫人。(テレーズと共に左手へ上つて来る)

第三場

ローラン。 カミーユ。 夫人。 テレーズ。

夫人。何やて、眞實に描上げなはつたんか。

カミーユ。(畫の前に支へながら) 然うですよ。まあ來て御覽なさい。

夫人。(畫を注視して) まあ。好う出来てること、好う出来てること。口元が特別好う似て居るやないか。なあ

テレーズ。

テレーズ。(餘り傍へは寄らずに)そうですね。(右手の窓の所に行き、額をガラス板に壓つけて何か考へながら外方を見る)
カミーユ。それに僕のフロックは如何だらう。辛と未だ四度しきや着ぬ婚禮服。ネウクタイが本當の布のやうに自然に描てるぢやありませんか。

夫人。それに又、この安樂椅子。

カミーユ。掴めそうですね。如何見ても本當の木だ。これはVenonから持つて來た椅子で、僕だけしきや掛わないんだな(他の安樂椅子を指さして)に母様のは水色ですね。

ローラン。(晝架と繪具圖と、其他の道具とを纏めて居たが左手へ來る)

夫人。(ローランに)何でまあ、こない左の眼の下を黒うしなはつたんや。

ローラン。それや影ですよ。

カミーユ。(晝架を元通り晝架に乗せて、右手寢室と窓との間の壁際に持つて行つて倚せかける)影が無かつたら、もつと美しかつたらうになあ恐らく。だが邪魔にやならん、宛然宮様でもに見えになつたやうだ。高貴ぢやないか。

夫人。ローラン様、貴方にまあ如何して御禮したら好ねやろな。カミーユが繪具代を上げて、一遍も受取つて呉れてやつたことはない。

ローラン。わや／＼それ處ですか、僕は反つてカミーユ君に御禮を言はなくちやならん程なんです。彼處に快く靜然と坐つてゝ呉れて。

カミーユ。君は何かい。僕が此のまゝで画を貰つとくと思ふのかい。仕うして／＼、直ぐに葡萄酒を一本取

つて来るよ。まあ何はなくとも、せめて君の健康を祝さなくちや。

ローラン。そう思ふんだつたら——僕も其の間に、額縁を取つて來やうよ。今日は、木曜日だつたね。ちやグリヴェーとミショー先生とが来る迄に、肖像画を掛けとかなくちや（中央の扉を過つて去る）

第四場

テレーズ。 夫人。 カミーユ。

カミーユ。（フロックを脱ぎ襟飾を變へる）

夫人。（彼に平常着を渡す）

カミーユ。（それを着てローランの後を追はうとする。しかし立歸つて來て）どんな葡萄酒を買つて來たものかな。

夫人。ローランの好きそうな酒を。あの子は氣立の好む子やなあ。私は自家の子みたいに好きやねん。

カミーユ。僕もですよ、僕も。兄弟だつて及ばん程好きなんです。赤葡萄酒を買つて來ませうか。

夫人。赤葡萄酒が好きやてかいな。何にせ、口當りの好む成るだけ甘いのが好むやろで——序に菓子か

ツクベルクかをな。

カミーユ。（テレーズに）處で、お前には注文はないんか。ローレン君、マラガ酒を飲むか如何か、お前知らないか。

テレーズ。（右手の窓を離れて前面へ來る）私、存じませんわ。しかし何んでも喜んで飲んだり食つたりするわ。土

百姓見たいな大食ひよ。

夫人。（叱責して）これテレーズ。

カミーユ。些ちと窘たしなめてやつて下さい。隠し忍ぶといふことが出来ない奴だ。ローラン君に氣取けきらして了つて。ローラン君は疾さつに覺さつて、僕にも左様言さようひましたよ。僕は非常に不愉快なんです。(テレーズに) 什うして
た前はまあ、俺の一番親しい友達を、其處に頭かしらをなしに出來るんだい。一體何をローラン君に含くんでる
んだい。

テレーズ。何も含くんざや居りませんわ。あの人は四六時中、吾家へ來ては、ぶら／＼して居るんですもの。
晝御飯と晩御飯とを食たべに來るのよ。——内密ないしよでた母様らが御馳走するもんだから。それに彼の人、今
此處に居たかと思ふと、もう彼方に居ると言つた風で——私肝癪かんしゃくが起るの。唯だそれだけですわ。身姿
だつてた母様らのやうに小瀟洒こせうしやとはしてないし、食道樂うまいものくいの癖に大の不精ふせいたれよ。

夫人。もう好ずわがいなテレーズ。た前かて知つとるやないか、ごない彼の子が困つとんのか。それや見るの
も氣の毒な屋根裏に住んでゐな、殆んど食ふにも困こまつとんのか。私は彼の子が、終日吾家いちじうちに來て居て、
時々御馳走してやれるのが幸福しあはせやと思ふねん。あの子が吾家へ來て煙筒パイプを燻くらしながら、此家こゝが如何
にも氣安やすそうなのを見ると嬉うれしうて仕様がな。眞實ほんまに可哀相な子や、唯一人で世間からは見棄すてられ
て。

テレーズ。だから、爲したいやうに爲なすつたら好いぢやありませんか。私、何も反對いっちや居ませんわ。精出し
て勞いたはつたり甘やかしたりなさいまし、私には唯ただい、何もかも結構で御座ります。

カミーユ。たつと、佳いことを思ひついたぞ——シャンバニユを買かつて來やう。これが一番だ。
夫人。然さうやシャンバニユなら彼の繪の御禮に恰度好なわやろ。けんぞ御菓子ごかしを忘れなや。

カミーユ。かうつと、今は八時半ですね。連中は九時になつて漸^{やうや}う來ると。先生達、シャンパニユの傍で會つたら、随分驚くだらうな（中央の扉を通つて去る）

夫人。（テレーズに）洋燈^{ランツ}を點火^{つか}へんの、テレーズ。私は店へ下りてくで（左方へ行き下へ下る）

（次の場の演戲中全く夜となる）

テレーズ。（暫くは動かずに立つたまゝで居る。用心深く四邊を見廻して自分だけみのを確めるまゝと深い呼吸をする。無言の所作。

それから前面へ歩出て深い安心の溜息をして苦惱と内心の憂悶のため顛折れる。終にローランが右手前方の戸口を這入つて來る。その足音を聞いて彼女にはつと微笑ふ。彼　精神は突然はげしい悦びに囚へらる）

第五場

ローラン。　テレーズ。

ローラン。テレーズ——

テレーズ。たゞローラン様——私、貴方が今來でだらうと思つてたの（彼を兩手で確乎と捕まへて前面へ連れ來る）一週間もた眼にかゝらなかつたわね。毎日の午後、私貴方を御待ち申して居たのに——た役所の方は何とか都合をつけて、た越しになるだらうと細つて——若し今日もた來でにならなかつたら、私それこそ什麼馬鹿なことをしたか知れないわ。ね何處に在らしつたの、この一週間。私も辛棒^{しんぼう}が出來ないの。たゞ晩に皆の前で握手が出來るだけぢや、眞實^{まったく}心寂しくつて冷くつて仕方がないわ。

ローラン。僕にも少しは言はして——

テレーズ。貴方は此處ぢや危いと思つてらつしやるの。何日まで小供なのよ。此室^{こい}より安全な所は無くつて

よ、聲音を高くして二三歩進む）それに誰も午後には、この部屋へ這入つて來やしませんわ、カミーユは役所だし、お母様は店だし。

ローラン。安心まし。好い女だ。僕は此室へ來るのを恐がつちや居ないよ。

テレーズ。おや私を恐つてらつしやるんだわ、白狀なさい。

ローラン。何故そんなに僕を疑ふんだ。それぢや前は知らないんだよ。お前が僕を全く捕へて終つて、眠ることさへさせなくて終つたんぢやないか。僕は氣でも狂つてるやうなんだ。これ迄些ども女なんかに注意もしなかつたのに、お前が僕の深い深い心の奥に、或る新しい人間を喚醒したんだ。僕自身こんな人間が、自分の内部に居やうとは知らなかつた。此奴が僕を不安にさすんだ。時々、そう、何でも言へぬ氣遣じさが襲つて來る。僕のお前に對する愛には、限界がない柵がないといふやうな氣がする。だから此の愛が、僕等の行かうとする處なり、もつと彼方へ連れて行きそうで仕方がないんだ。

テレーズ。（顔をローランの肩に凭れさせて）あら、それこそ無終の悅樂だわ。太陽の光に照らされて行く永遠の漂泊たわ

ローラン。（急に飛離れる）叱つ、段梯子の上に。何も聞かない（間）
兩人。（注意して耳を傾ける）

テレーズ。何でもないわ、木の乾く音よ（再び近寄る）何でもないので――氣の故だわ。貴方も私みたいに可愛がつて頂戴よ。怖れもなく悔ひもなく。せめて貴方が、前には什麼みじめな生活を私がして來たか知つて下すつたら――小供の時分には、私、病室の濕ばい埃の中で、暮して來たものだわ。

ローラン。可哀そうに。

テレーズ。本當よ、慄然するやうな時を過して來たわ。何時間も、火の前に蹲踞んだつきり、白痴のやうに沸騰る湯を賭めて——それこそ始終、病つてるカミーユに茶を飲ましたり、濕布を取變へたりしなくちやならなかつたのだもの。身動きしても、叔母が叱つたわ。カミーユの眼を覺ましちや不可かつたの。私もう歩くことも物言ふことも出來なくなつて——何處かのた婆さんの如に、咄つたり顫へたりしてたわ。その頃の醜態つたら、カミーユがよく馬鹿にしたものよ。でも私、自分の身内に誇りかな力を感じては、よく小供らしい拳をぐつと握緊めると、周圍にあるものは何でも、粉微塵に打碎けそんな氣がしたものだわ。私のた母様、何でも亞弗利加の土人の酋長の娘だつていふけれど——如何もさうに違ひなくつてよ。だつて私、何處でも關はず走つて行く夢を見るのは、一度や二度ぢやないもの。素足でね、それや埃っぽい大道を辿つて、乞食のやうにパンを強請つたりして居るの。た母様どう思つても、た優しい方ぢやなくて、私、痛い——艱難に會つたやうに思へて仕方がない（聲を高める）

ローラン。（驚いて左方の階段の方へ歩いて行つて、も一度耳を澄ます）靜かにね言ひつたら。叔母様が來るぢやないか、聞きつけて

テレーズ。來るなら來るが好いわ。自分を餘計悲慘にするばかりだわ。私些とも包隠しなんかしないから（中央の卓に手を十字に重ねて坐る）私、自分でも解らないの、如何してカミーユと夫婦になる氣になつたのか。私等が夫婦になるのは、もう小供の時分から定つたのよ。叔母は唯だ私等が妙齡になるのを待つてたの。十二の時だつたわ、叔母は此處ことを言つたわ「た前は將來は彼の子を愛して世話するねんで、從

兄をな」つて。恰度カミーユに看護婦が要る時だつたのよ。うちの叔母と來た日には、あの弱い小供が死にかけたのを二十遍からも助けたんでせう。だもんだから神様か何ぞのやうに祭上げてゐね、私にも同様、同じやうに世話をするやうにばつかり嫉けたのよ。（聞）私それには何とも反對はしなかつたの——勇氣が挫けてしまつて——皆が私を臆病にして終つたんだわ。病つてる兒の可憫さつたら——私、一緒に遊んでると、指が彼の兒の肉に突入るのよ、宛然軟い、粘土かなんどのやうに（暫く間を置いて）夜になると私、結婚してから、段梯子の左にある自分の部屋へは全く行かなくなつて、右手にあるカミーユの部屋へ行くやうになつたの。大變な相違だわ、これで何もかも終ひだつたのよ。でも貴方が——
ローラン様——

ローラン。好きだと言ひなの（彼女を抱いて卓の左手に、もの柔かに坐らせる）
テレーズ。ね、私は戀して居たのて。あのカミーユが貴方を店へ連込んだ日から——ね、臆れてらしつて、ね二人が役所で再會になつた日よ。その日からだわ。私如何したものか別の人間になつて終つたの、誇りかな希望と勇氣とに充ち満ちて。私、でも如何して戀するやうになつたのか、自分でも解らないの。だつて最初、貴方が嫌いだったんですもの。貴方に見られると、氣がわく／＼して苦しくなつたんですもの。這入つてたいでになるでせう、すると神経が張切つてしまつて、今にもピンと張り裂けそうになるのよ。それで居て、その苦しさ慕はしくつて／＼、來になるのが待切れなかつた程だわ。ほら貴方が、カミーユを描いてたいでだつたでせう、あの間、私、一生懸命で抵抗うて見たんですけれど、宛然貴方の足下に釘づけにしられたやうに、蹲踞んで居なけれやならなかつたの。だつて如何することも

出来なかつたんですもの。

ローラン。テレーズ。如何に僕が愛して居るか（彼女の前に膝まづく）

テレーズ。家ではね、木曜日ごとに此上もない幸福にして、唯一の楽しみにして、あのグリヴェーの愚直者や、ミシヨの爺さん（おじいさん）を呼んでるの、御存知でせう貴方、あの二人を、木曜日の晩はドミノの勝負で、それや果（は）たさないのよ。私直ぐ頭（かぶ）がぐら／＼して終ふの。でも木曜日は、次から次へと来て絶（た）える時つちやないし、氣を滅入（めいじゆ）らす死んで終ひそうな物憂さは、猶（なほ）且（かつ）又しても／＼やつて来る。しかし今はもう、彼等（かれら）には關（か）はないで、此方（こなた）から復讐（ふくさう）をとつてやるんだわ。晚御飯（ばんごはん）が濟（き）んで、あの大きな圓い卓（ぐろり）の周圍に坐（ま）るでせう、すると私、いかにも親（おや）しそうに彼奴等（かれら）を扱（あ）つてやるのが、意地（いぢ）の悪い歡喜（よろこび）を感じるの。貴方（あなた）等（ら）がドミノを遊（あ）つてらつしやると、私、それには關係（かんけい）がないといつた風に刺繡（ぬいさう）にかゝつて、あのくだらない物憂さの中で、甘い／＼思出（おもひで）に耽（ひた）るのよ。あゝローラン様、これも樂しみの一つですわ

ローラン。（何かの響（こ）を聞いたやうに思つて驚いて立上る）ほんとに聲（こゑ）が高過ぎるつたら、氣（き）をたつけよ。叔母様、何時（いつ）やつて来るかも知れやしない（左方螺旋梯子（さほうらせんたき）の所へ行つて耳（みみ）を澄（す）まして歸（かへ）つて来る）僕（ぼく）の帽子（ぼうし）は。

テレーズ。（靜かに立上る）叔母（おば）が來（き）ると思（おも）つて（左方螺旋梯子（さほうらせんたき）に歩（あ）寄り、歸（かへ）つて來（き）て低（ひ）く言（い）ふ）本當（ほんとう）だわ、行（い）つてしまふ方が賢（と）つてよ、でも明日（あした）の相談（さうだん）をして置（お）かなくちや。貴方（あなた）に越（こ）しになるでせう。二時（ふたじ）に

ローラン。いや待つて居（い）ないが好（い）いよ。來（き）られないから

テレーズ。來（き）られないんですつて。何故（なんぜ）。

ローラン。役所（やくしょ）の監督（かんとく）が氣附（きづ）きやがつたんだ。僕（ぼく）がよく役所（やくしょ）を脱出（だつしゅつ）するのを。それで今度（こんど）やつたら解備（やめさ）すつ

て嚇しやがつたんだ

テレーズ。ぢや、もう貴方とは眼にかゝれないのね。もう全然来ない決心。それが貴方の氣の毒な策略なの。ぢや私にも言ひたいことがあるわ、貴方は卑怯者よ。

ローラン、(彼女を胸に掻寄せつゝ) いや／＼、僕には二人に安らかな幸福を齎すよう、他に別な考へがある譯ぢやない。だが先づ試て見るより他に仕方がない、待つより他に仕方がない。僕は前を一日中、自分のものにしたいと幾度夢に見たことか。その中、希望は増々つのつて、一月一緒に居たら如何に幸福だらう、一年居たら如何だらう、更に一生居たらと思ふやうになつた。僕はやくざな官吏なんか止しちやうて、又畫家になる。前は前で、好きなことが出来る。そこで僕等は甘い熱い永遠の愛の中に、和合し結合される。そうなつて初めて、前は幸福だとは思はないかい

テレーズ。(微笑みながら彼の胸に倒れかゝつて) あゝ。何といふ幸福でせう。

ローラン。(そつと彼女から身を離して低く言ふ) 若しも前は寡婦だつたら――

テレーズ。(夢みるやうに) 結婚になりますわ、誰も恐がることはない――私等の夢を眞實にしますわ

ローラン。僕には、暗の中に輝く、前の眼より他何も見ぬ。額に焼きつく如な、前の燃れてる眼より他には何も見ぬ。でも二人のために、僕は無暗なことは出来ぬ。だから行かなきゃならぬ。左様なら
テレーズ。

テレーズ。明日は、それちや被來しやる。

ローラン。いや――信じてれいで――今の所、二人は逢へないとしてもな、僕等は二人の幸福のために働い

て居るんだよ(彼女を抱いた後、右手小さな扉を通つて急いで去る)

テレーズ。(暫時一人のまゝ。短い沈黙の後) もしも寡婦だつたら――

夫人。(左手から上つて来る)

第六場

テレーズ。 夫人。 後にカミーユ。

夫人。如何したんや、未だ燈を點火へんのかいな。瞠乎としとつて。まあ待つとり、お前は。洋燈は臺所やつたな。私が持つて来るよつて(中央の扉を通つて去る)

カミーユ。(中央の扉を通つて這入つて来る。シャンパンの瓶とバックベルグを一切れ抱へて居る) 皆、何所に居るんだ。何だつて洋燈を點火ないんだ。

テレーズ。(急激に粗暴に) 叔母様に取りに行つてます

カミーユ。(喫驚して) なんだ、お前そこに居たのか。喫驚したぢやないか。もつと他に言ひ方もあるだらうに。暗黒の中で聲を掛けられると、俺は辛棒が出来ないんだ。そのこと、お前知つてゐるぢやないか。――假令惡戯にした處で

テレーズ。惡戯なんか致しやしません。

カミーユ。宛然幽靈のやうに、俺の前に立つてゐるなんて――氣の利かぬ話だ。これからは氣をたつけ。今夜、眼を覺ましたら、又白い女が寢床のまはりを忍び足に歩いて、俺を絞殺さうとしてゐるだらうなあ。笑ふなら笑ふが好いさ。

テレーズ。何も笑つちや居ません

夫人。(火の點つた洋燈を持つて、中央の扉を歸つて来る)

第七場

テレーズ。夫人。カミーユ。

夫人。如何したんやな

カミーユ。テレーズが嬉戲で、僕を暗黒の中で喫驚さしたんですよ。も少しのことで、シャンバニユを落す處だつた。三Francs、ちやんにする處だつた。

夫人。三フランしたんかいな(シャンバニユの瓶を取る)

カミーユ。ねえ、又例の St. Michel 廣小路まで走つてつたんです。あそこにや、三フランで賣つてる店があるんです。八フランもする程上等なんですがねえ。酒屋なんて、皆な欺騙者みたいな奴ですよ。異ふはレッテルだけなんです。はい、バックベルク。

夫人。此方へた寄越し。グリヴェー様やミシヨール様が面喰ふやうに、皆卓子に載せとくさかい。喫驚しやばるやちな。皿を二枚借してんか。テレーズ(シャンバニユの瓶を、バックベルクを盛つた二枚の皿の間に置く)

テレーズ。(右手の仕事卓に倚つて、刺繍を初める)

カミーユ。見て居て御覽、グリヴェー様は、時計のやうだから。九時が鳴ると其所へ來て居ますよ。ね願ひして置きますが、出来るだけ親切にしてやつて下さい。成程あの人は、役所で大した椅子に居る譯ぢやないんですがねえ。でも時々僕にや役に立つんですから。お母様らは斯う言つても信用なさるまいが、

確かにあれで、猶且、随分と用に立つ人間なんです。一番古くから居る人達でも、あの人が二十年間些ども變らず、役所へ一分だつて遅れて來たのを想出すことは出來ないんです。ローラン。が常々、彼奴は間拔けだと言つてゐるのは、大變な間違ひだ

夫人。ミシヨ一様かて時間の几帖面なこといふたら。矢張あれを務とつたに蔭やなあ。未だ貴方等も臆ねとつてやろ、彼のね人が Vernon で警官を務とつたことを

カミーユ。ええ、しかし Vernon を出て、姪と巴利に住むやうになつてからは、些た頼れましたねえ。シュザンヌがあれで、何事につけても少しづつは、引廻して行らしてますよ。兎に角、友人が居て、一週間に一度、自分の家へ呼べるてゐるのは有難い。尤もそれ以上となると、金が要つて困るけれど。所で皆が、やつて來ない中に、少々話し度いことがありますかね、お母様。一つ趣向があるんです

夫人。趣向が

カミーユ。ねえ、お母様、御存知でせうが、僕テレスーと冬の來る前に、何日か、日曜日を Saint Ouen の

田舎で過さうつて約束して居るんです。都會ぢやテレーズ、私と一緒に街路を散歩しないんです——

並木街の方がその癖せ、田舎よりは確かに愉快なんですがね——私と歩くと、疲れて困るんですつて、これぢや何所へも、行つたりなんか出來やしない。そこで妻にも、楽しい目をさせてやらうと思つて、

今度の日曜に Saint Ouen へ行くことにしたんですが、ローランも一緒に連れて行かうと思ふんです

夫人。さうかいな。それや好い思付やな。私は随て行かれへんけど、足が何せ、もう眞直ぐに行かうとせねへんよつてな。けんご貴方等は、まあ行つといで。思付が好かつたな。ローラン様には、面の御禮が未

だ足らんよつて、甚麼でもしたら全部濟む譯や

カミーユ。先生田舎へ行くこと、それや燥ぐからね。臆わてるかい、テレーズ、私等と Suruses へ行つた時のことを。ヘルクレスの如な力があるからなあ、あの怠惰者先生。廣い／＼溝を跳越ゐる。重い／＼石を空高く投げる。それから Suruses のメリー、ゴウ、ラウンドで、駈つてゐる驛場馭車の眞似をやる。馭車の喇叭に――鞭に、それから馬に拍車をあてた様子。とう／＼可笑しつて／＼死んで終ひさうだつた。恰度來合はして嫁取りの連中が、如何しても笑ひ止むことが出来なかつたぢやないか。あの嫁さんは確かに病氣になつたぜ、なあテレーズ

テレーズ。直ぐ燥げるのよ彼の人。前には随分飲みましたのね

カミーユ。うん。お前には如何したつて解らないんだよ、他人が如何して愉快になれるのか。俺を樂ますつもりなら、わざ／＼ Saint-Ouen へ行くまでもないのだ。お前は草の上へ身を投げて――雲を凝視とか、セイヌの流れを見入るとかしてりや好いのさ。いや／＼猶且ローランを伴れて行かう、是非――先生なら俺も退屈をせぬから。だが先生、一體何處へ杵を取りに行つたらう。

(左手下の店で鈴が鳴る)

ほら來たな(柱時計を見る)グリヴェー様にしちや未だ七分早い。(夫さ低く嬉しげに話をする)
ローラン。(杵を手に左方から上つて来る)

第八場

前場の人々。ローラン。

ローラン。皆のことなら未だ終つちや居まい。ほうらな——（カミーユと夫人とが話して居るのを見ろ）賭けやうか、カミーユ君。又御馳走の献立にかゝつてゐるな

カミーユ。まあ、何だか推量で見給へ

ローラン。ぢや、明日の晝には、飯入り鶏肉の御馳走があつて、僕を御招待でも遊ばさうといふ趣向かい夫人。まあ食ひ意地の汚い人。

カミーユ。飛んでもない大違ひだ。實はテレーズをね、今度の日曜に Daint Onen へ連れて行くんだが、君も一緒に行くやうに御案内しやうと思ふんだ。行くかい

ローラン。行くかいつて——行かなくつて如何する（肖像畫を畫架から取つて粹に穿る）

夫人。（彼に小さな種を渡す）なあローラン様、貴方は分別しとつてやよつて、カミーユを御頼み申しますせ。此子から見たら貴方は壯健やし、私も貴方に頼みしてある思ふたら、安心しとれますさかいな

カミーユ。お母様、何です。何時まで心配するんですよ。隣町までだつて、行かれやしないぢやありませんか、直ぐに貴方が大變なことを想像するから。僕は疾から、もう不快で——堪らないんだ。何時まで經つても貴方は、小供のやうに扱ひなされるから。ところで好いかい、辻馬車を一臺傭ふて堡壘の所まで行く。其所迄は、只だ一ツウアさへ拂へば可い譯だ。それから徒歩で行つて、午後を島で暮らして、夕方セイヌの岸で遊んで、晩食に焼魚を食べやう。これで好いかい。好いんだね。

ローラン。（前面で、眼を畫から上げずに）結構。——だがプログラムを擴大する餘地はあるやうだね

カミーユ。如何して。

ローラン。(テレーズに、ちらと眼を呉れて) セイヌ河の舟遊び。

夫人。不可々々。舟遊びなんか不可。何やしらん心配だす

テレーズ。貴方等は、カミーユが水の上を行つたり出来ると思ひなすつて。それはく憶病なんですよ
カミーユ。俺が憶病だつて

ローラン。あ然うだつたな。君が水嫌ひのことは些とも考へなかつた。威程そうだつたな(僕等が Vennou で
小供の時分、セイヌに入る時は、君は何日も岸でぶるく顫へて居たものなあ、残念だが、ちや早速舟
遊びは止めとせう。

カミーユ。だが、それや、全く嘘言だよ。俺や些とも水なんか怖れやしないんだ。畜生、そうだ君達は俺を
正符づきの憶病者にするんだ。舟遊びをやらう——好いとも、誰が一等勇氣があるか見やう。テレーズ
が一番怖りだから。

テレーズ。ねくくた氣の毒なこと。話だけでもう眞青になつてゐらつしやる。

カミーユ。まあ何でも言ふさ。今に判明るから。

夫人。カミーユ、カミーユいふたら、舟遊びだけは思止つて呉れ、私の爲めや思うて。な心配やさかい。
カミーユ。お母様、心配しなさんな。私が氣に掛けたとなると、病氣になるのを知つてるちやありませんか。
ローラン。ちや好しど。だがテレーズ様に決定さくないと

テレーズ。不幸は何處にだつて起りますわ

ローラン。眞乎に然うだ。道を歩いてたつて、滑つて倒れるかも知れないし、屋根瓦が頭の上へ落ちて來な

いとも限らないし――

テレ！ズ。私だけなら、皆も御存知の通り、セイヌ程好きな所はないの
ローラン。(カミリーヨに)ぢや決定つた、カミリーユ君。君が勝つたんだ。舟遊びをしやう

夫人。(ローランに)あゝ、何とも彼とも言はれん程、この遠足が心配になりまんね。カミリーユは、あんな強情
者だつしやろ――貴方も御覧になりましたやろけんぞ、眞實に前後の思慮が無うなりますねんさかい。

ローラン。御心配なさいますな、小母様。私がちやんと控へて居ります。それにしてもまあ、書を掛けどか
なくちや(書を中央の扉の右手、戸棚の上方に掛ける)

カミリーユ。燈光が、さあ充分とれるか知らんて。

(左方、下の店で鈴が鳴る)

(同時に時計が九時を打つ)

カミリーユ。九時か――グリヴェエー様だ。

グリヴェエー。(中央の扉を通つて現はれる)

第九場

前場の人々。　グリヴェエー。

グリヴェエー。又私が一番だつたな。今晚は奥様方、今晚は男子方。

夫人。今晚は。雨傘を頂戴しまひよう(傘を取る)雨でも降つてまんのか。

グリヴェエー。いや、降る、かも知れませんがね。降るかも。

夫人。(雨傘を左手の暖爐の左側に置く)

グリヴェー。其偶ぢや不可^{いけません}。別の側へ。もう長年の習慣^{しきたり}でねわ。そう—そう—有難う

夫人。ゴム靴を貸しなはれ(椅子を渡す)

グリヴェー。いや何、ちよいと自分で脱ぎます(渡された椅子に腰を下す)何でも自分でするんですよ。何でも自分

分で。何事に限らず、総てその有るべき所に無ければならんで(脱いだゴム靴を雨傘の傍に置いて)やれ—、これで全然落着いた。

カミーユ。所で、何か變つた話はありませんか。

グリヴェー。(中央へ歩み出つと)四時半に役所を退^ひけて、六時半にカフェ、サチユルニで新聞を読んで、さやう今日は木曜日だから、平常^{いづも}のやうに九時には寢室へ行くことをせずに、此家へ來たと(考へて)それで全部^{すべから}だと思ふが。

ローラン。途中で何も變つたものを御覽ぢやなかつたですか

グリヴェー。やあ成程、失敬だつた。Saint Andre' des Arts 通りが恐^{ひそたか}しい人集りでねわ。た蔭で別の側を來なければならぬなんて—迷惑をしたよ。朝はつまり役所へ行く時には左側を通つて、夕方役所から退け時には—

夫人。右側だつしやろ。

グリヴェー。いや—待つて下さい(歩み方を明瞭に思浮べるために五六歩あるく)朝は斯^かうと—夕方には斯^かうと—
そうだ。

ローラン。成程そいつは好いですね

グリヴェー。左様。何時も街路の左側を歩く。常に左側を離れぬ——鐵道のやうに——左を走る——左に外
る。至つて氣持の好いものだ。斯うさへして居れや、街路で間違つくことはない
ローラン。何だつて又、^{また} Saint André des Arts 通りが其座に人集^{ひとあひ}がするんだらう。

グリヴェー。ほんになあ、そいつは私も知らぬ、また如何して知つて譯^{わけ}があらう。

夫人。大方、何ぞ起つたんやろ

グリヴェー。確かに然うだ。貴方が仰言る通り、何か大方起つたんだらう。そんなことは夢にも思はなかつ
たが。これでまあ氣が濟んだ。何か起つたんだらう——(中央の卓の右側に腰を掛ける)

(中央の扉が開く)

夫人。ほらミシヨー様や。

ミシヨー。(シユザンヌと中央の扉を入つて来る)

第十場

前場の人々。 ミシヨー。 シユザンヌ。

シユザンヌ。(面紗と帽子を脱いで、仕事机に倚つたまゝのチレーズの傍へ急ぐ。そして低く彼女と語をする)

ミシヨー。(挨拶のために皆と握手をする)又しても少々遅刻したやうだねわ(グリヴェーの前に立止る)

グリヴェー。(時計を衣鉢から出して勝誇りながらミシヨーに突出す)

ミシヨー。解つたよ、解つたよ。九時と十分——あの小さな魔女のためだ(シユザンヌを指す)店といふ店の前に

は、必ず立止るんだもの（左手前よりの 側へ行つて洋杖をグリヴェーの雨傘の傍へ置かうとする）

グリヴェー。た頼みだから、私の雨傘の傍へは置かないで下さい。知つてゐる通り、仕うも私は、それが不快なんだから（聲を高くして）貴方のためには、故意杖を置くやうに、別の側を残して置いたよ。

ミシヨ。はい、解りました。解りました。もう大きな聲をすのは御免だ。

カミーユ。（ローランに低く）ねえ君、グリヴェー様はシャンバニユが氣に入らぬのだらう。三度も瓶は見たけれど、何とも言はぬせ、珍らしくはないのかしら

ミシヨ。（再び會集の方を向き、シャンバニユを見る）やあ此奴は。皆で一つ充分酔はなくちやならんぞ——眞物のシャンバニユだね。

グリヴェー。まつたくシャンバニユだ。——シャンバニユだ。——私は生れてから四度シャンバニユを飲んだ。ミシヨ。何の祝ひです、今日は

夫人。（カミーユの肖像の出来上つた祝ひでんね。ローラン様が今日仕上げなはつたもんやよつて（洋燈を取つて肖像を照らす）御覽になつて呉んなはれ皆様。

人々。（肖像を見るために従ふ）

テレーズ。（取られて右手の仕事卓に倚つたまふ）

ローラン。（同に、左方前よりの暖爐に凭れて居る）

カミーユ。物でも言ひそうだ。訪問姿といふ所だな。

ミシヨ。ほんに然うだね——

夫人。未だ些^{ちつ}ども乾いてまへんね。繪具が香ひまつしやろ。

グリヴェー。はゝあ、其奴^{そいつ}だつたんだな。――來ると直ぐ。何か香ふと思ふたて。寫眞は其處になると、香ひのせぬのが結構だね。

カミーユ。わゝ、それや眞實^{まうたく}ですわね。ですが繪具が乾いてしまつたら

グリヴェー。それや勿論、君、繪具が乾いて終ふたら――直ぐに又乾きもするがね。と言つて左様^{さよう}とも限られんて。Rue La Harpe^{リユー・ラー、アルプ}の或る店は、此の間塗^{あいだ}つて乾くのに五日は充分要^{たつぷり}つたからな。

夫人。ちよいとミシヨ一様。貴方^{あなた}に氣に召しましたか。

ミシヨ一。よく出來ましたわね。眞實^{まうたく}大^{たい}したものです。

人々。(中央の卓に歸る)

夫人。(洋燈を中〇の卓に置く)

カミーユ。もう茶にしたら如何です、お母様。シャンパニユはドミノの後で飲みませう。

グリヴェー。(坐りながら) 九時十五分と。本式にはもう勝負^{やれ}れないな。

夫人。もう、ほんの五分だけ。――好^おねくテレーズ。お前は未だ本當^{ほんたう}には復^{なほ}つとらへん。

シユザンヌ。(喜ばしげに) 私はピンくして居ますわ、小母^{おは}様。私が手傳つて上げませうわね。此處^{こゝ}とだと、些^{ちつ}とやつて見たいのよ、私は。

夫人とシユザンヌ。(中央の扉を通つて退場)

第十一場

テレーズ。　グリヴェー。　カミーユ。　ミシヨール。　ローラン

カミーユ。所でミシヨール様、何か變つたことを御存知ありませんか。

ミシヨール。いゝね――皆無^{ねつから}。姪をリュクサンブールの公園へ連れて行きましたが。た、そうく有つた。 Rue Saint Andre' des Arts の怖^{おそ}しい話^わ。

カミーユ。怖しい話。それや一體どんな話なんです。グリヴェー様は此家^{こゑ}へ來るとき、たゞあの街が平常よりは人集^{ひだか}かしてゐるのに、氣がついたいけなんですつて。

ミシヨール。今朝から、彼處へは宛然^{まろで}人の海嘯だ。(グリヴェー)皆^{みんな}な空を見て居たでせう

グリヴェー。そこまでは知らんなあ。直に礮石道^{みち}を變へたから。何か變事でもあつたのかな (小さな帽子を衣鉢から引出して被り、同様袖置ひをも着ける)

ミシヨール。起つたか處^{ところ}ですか。De Bourgogne ホテルで、客の行李に四裂^{よつぎ}になつた女の死骸が有つたといふ騒ぎなんです。その客は、ごろんと消れて跡もなしさ。

グリヴェー。無殘ことをしたものだなあ。四裂^{よつぎ}に、女を四裂にするなんて、其れことが出来るのだらうか。カミーユ。眞實^{ほんじつ}に怖^{おそ}しいことをしたものだなあ。

グリヴェー。それに、私は恰度あそこを通らにやならぬ。然ういふ、今思出した。皆な空を仰いで居つた。空に何かゝ見えたのかねえ。

ミシヨール。何ねえ、その行李かあつたと思はれてる、部屋の窓が見えるのですよ (間)處が然うぢやないのだ。その部屋は庭に面してゐるのだ。

ローラン。犯人は逮捕りましたか

ミシヨ。いや。私の以前仲間だった男が、搜索を命ぜられてるんですがね、其人の話ちや、皆呉まだ手懸が上らないつてことでしたよ。

グリヴェー。 (嘲るやうに笑ふ)

ミシヨ。私も是は随分困難だらうと思ひますよ。

ローラン。被害者は誰か分つたのですか

ミシヨ。同様分らないんです。何しろ佛様は裸體で、首は無いと來てるんですから

グリヴェー。何處かへ必と遣て終つたんだね。

カミーユ。ですが皆様、何卒もう話さないで下さい。四裂の女の話聞いてから、慄然して身顫ひのしつ

けです

グリヴェー。何のこれいさのこと。私は少々身顫ひする位のが大好きさ。それも何の危険も伴はず、全く自身

が安全な時にやね。ミシヨ様は、未だ警官を務めてた時分の、素晴らしい話をして聞かすが、本當に巧手

ものだ。皆は未だ隠れて居でかな、ほら甜菜畑に腕がにゅつと突出てたといふ、埋められ憲兵の珍し

い話。何でも彼話は去年の秋に聞いたのだつけなあ。眞實に面白かつた。こゝちや勿論それや、皆なが

此座に愉快に集つてるんだから、人殺しが背後に立つてる心配も要らぬが。それこそ、神様のた傍に居

るやうなものだからなあ。しかし森の中になると、そうは勿論ゆきかねるで。ミシヨ様と森の中を通

抜けるやうな事があつたら、それこそ其座話は止して呉れと、私も手を合せることだらう。

ローラン。(ミシヨーに)ちや貴方は、罰を受けずに済んで居る犯罪が、饒多もあると思ひなんですか。

ミシヨー。然(な)わ(わ)。人知れずに犯される犯罪が、如何(どう)に多いでせう。やれ誰某(たれ)が居なくなつたことの、やれ彼所(かれ)ちや誰が衰弱して死んだことの、やれ此處(ここ)ちや窒息して死んだことの、かと思ふと又、聲も立てず血の斑點(かた)も何も残さずに、死んでたことのと、警官が傍を通つてゐ、それで居 何も知らないんですからね。人を殺しといて、白晝(はくしつ)大手を振つて散歩(さんぽ)してる奴は、確かに一人や二人ゝやありませんよ。グリヴェー。(嘲るやうに笑つて)それや笑談だらう、ミシヨー様。何だつて又捕まへないんかな、そんなに散歩してるんなら。

ミシヨー。處(ところ)がグリヴェー様――奴等は捕まりませんね。警察の方で殺人犯人(ころしはん)だなぞたあ、夢にも想ひませんから。

カミーユ。ちや警察の組織が充分でないんですかね。

ミシヨー。然(な)う(う)なん(ん)でせう(う)。(間)しかし出來ない相談は幾(いく)ら警察にだつてね。冗言(くちや)やうだが、平氣(へいけい)の平左で敬はれたり愛されたりして、世間を渡る人殺しが居りますよ。グリヴェー様、貴方(あなた)嘘言(うそ)だと思つて頭(かぶり)を振つたら、大變(だいへん)な了見(りやうけん)違ひ(ちがひ)ですぜ。

グリヴェー。何と言つても、私は頭(かぶり)を振る――私は頭(かぶり)を振る。何卒(どうぞ)嚇(おそ)さないで置いて貰ひませう。

ミシヨー。嘘言(うそ)ぢやないんですよ、眞實(まこと)。(まこと)貴方は些(ち)とも御存知(ごぞんじ)ないが、そう言つた人間と貴方が毎日、交際(こうさい)つてるかも知れませんぜ。其奴(そのやつ)が毎朝心から親し(おんなじ)そうに、貴方と握手(ごしゅ)してるかも知れませんぜ。

グリヴェー。あゝ、もうそれで結構々々。餘り話が極端(ごくたん)すぎる。そんな事があつて堪(た)えるものか。貴方(あなた)だつ

自分で熟く其處ことは無いと知つてゐる癖に。何なら私も、一つ話をしても好いのは好いのだが。

ミシヨ。さあさ、話したり〜

グリヴェー。話すよ、話すと言つたら話すよ。手癖の悪い鵲の話さ。

ミシヨ。(肩を挫かず)

グリヴェー。それや最早勿論、貴方も知つてゐるであらうよ。私の知つてゐる位のことば、何もかも疾に御承知だらうよ。貴方にや、眞乎に何だつて話は出来ん。昔一人の下女が居つたとか。その下女が銀の匙を盗んだといふので、牢屋へ投込まれたつてな。處が二月経つて、白楊の樹が切倒されたら、鵲の巢の中から銀の匙が出て來た。ほらね、銀の匙を盗んだ奴は、實は鵲だつたのだ。下女が直ぐに放免になつたのは勿論だよ。ねねミシヨ様、本當の犯人は此處風に、到る處發見されては罰せられる。

ミシヨ。成程——ちや、鵲は牢へ入れられましたか。

グリヴェー。鵲が牢へ。鵲が牢へ。何のミシヒヨ様、そんな馬鹿げたことが出来るものかね

カミーユ。ミシヨ様。其處ことをグリヴェー様だつて、言はうとなすつたのぢやありませんよ。それや本論外といふものです。

グリヴェー。私や警察組織が悪いと、ほんに残酷ことになると言ふ心算だつたのだ。

カミーユ。誰にしる、假りに人も人を殺しといて、平氣で生活して行けるものだなんて、本氣で思へるかい、

ローラン君。

ローラン。其處ことが解るものか(室を横切り次第にテレーズに近づく)だが皆なは、ミシヨ様が些と翫つて見たば

かりなのが、解らないのかね。唯だ彼廢話をして、怖らさうとしたまでさ。ミシヨ一様にした處が、誰も知らぬことを、如何して知ることが出来る。假令其麼惡智慧の廻つた奴が居てさ、惡事を働かうと僕の關つたことぢやないやな——其奴に、それだけの力量が有るならテレーズの條でまあ見るが好い、テレーズ様は諸君のやうに、そう飛上りぢやない。

テレーズ。眞實ですわ。私も、そう思ひますの——誰も知らないことなら、世の中に無いのですわ。

カミーユ。それや然うだ。しかし、何か別の話をしたら如何ものだらう。それが好いくな、何か別の話をしやう。

グリヴェエー。私も其の方が可い。何か別の話をしやう。

カミーユ。椅子を店から、未だ持つて來ちや居なかつた。(問)皆様、手を貸して下さい、椅子を持つて來ますから(左方に行き店に下る)

グリヴェエー。(立上つて咳く)椅子を持つて來るのが、他の話をするつてことかなあ。

ミシヨ一。ねねグリヴェエー様、貴方行つしやるか。

グリヴェエー。た隨伴をします、た隨伴を。鵲が牢へ入れられたかつて。戲言も大概になされた。以前警官を——して居た時分、鵲を牢へ入れた臆れがあると見れて、甚く氣になるのだね、ミシヨ一様。

ミシヨ一とグリヴェエー。(左方へ行き店へ下る)

ロートラン。(テレーズの手を劇しく掴んで、低く誓つて私の言ふことを容くかい。

テレーズ。(同様に低く)ね、私は貴方のものなのですもの、如何でも勝手になさい。

カミーユ。(下から呼ぶ) たいローラン君、怠るにも程があるぞ。此麼人を寄越さなくつても、君一人で椅子の三つや四つは、持つて行けるだらうぢやないか。

ローラン。(聲を高くして) 僕あ上で、少々ばかり、君の妻君の機嫌を取つてゐるのさ(低くテレーズに) 二人に幸福な時の来るのを願つて居る。

カミーユ。(下から笑つて) まあ試つて見るさ、巧く行くか。僕にや一切苦情なしだ。

ローラン。(テレーズに) 臆れてゐ居るよ。「誰も知らないことなら、世の中にや無いのだ。」

(左方の階段に足音)

ローラン。氣をな附け(速に離れる)

テレーズ。(再び何の變りも無いやうに、右手の仕事卓に倚つて居る)

ローラン。(その左側に立つて居る)

他の人々。(椅子を持つて高く笑ひながら、階段を上つて来る)

カミーユ。(ローラン) 君のやうなやぐざな人間は無いよ。へん、茶利助が何を言ふやら。妻君の機嫌を取つてゐるのださ。聞いて呆れるよ。椅子一つ持つて来るのが、其座にも大層なことだらうか。

グリヴェー。だが、なゐに同じさ。——ほら茶も來た(自分の時計を見る)

夫人とシユザンヌ。(中央の扉を通つて茶を持つて来る)

第十二場

前場の人々。

夫人。

スザンヌ。

夫人。(ケリエザーに) 存じります、随分待たせ申しました。何卒まあ、腰を掛けてお呉んなはれ皆様腰を。費した時間は、即刻取り返しますさかい。

グリヴェー。(右手前より坐る)

ローラン。(その、背後)

夫人。(その安樂椅子は左手の方にある)

ミシヨ。(彼等の背後の方に坐る)

カミーユ。(安樂椅子に坐して中央に居る)

テレーズ。(右手の仕事卓に倚つたまゝ)

シユザンヌ。(テレーズの傍、茶の給仕の出来る位に坐る)

カミーユ。そうら安樂椅子に腰を下したぞ。處でね母様、ドミノの函を下さい。

グリヴェー。(如何にも快げに) 何といつても、これ程愉快なものはない。木曜日の朝は眼が醒めるとから、この家へ夕方来るのが楽しみだ。それに眞實、かういつても皆は信じまいが、如何に――

シユザンヌ。(妨げる) も些しばかり、お砂糖を上げませうか、グリヴェー様。

グリヴェー。そいつは至極結構。貴方は、ほんに可愛らしいな。二切ばかり――お願ひ出来るものなら――可いだらう、二切。眞實だよ、皆はかう言つても信じまいが、如何に――

カミーユ。(妨げる) たいテレーズ、お前は來ないのか。

夫人。(彼に箱を渡しながら) あれば放つとき――未だ全り快くもなつとらへんのやないか。それにドミノかつて

好きやないし。誰ぞが店へ来でたら、恰度下へ下りてくのに好ね。

カミーユ。氣の毒だなあ、私等が此處に楽しんでるのに。(夫人に)お母様、ぢや坐つて下さい。

夫人。(坐つて)へね、坐りました。

カミーユ。もう皆なだね。

ミシヨ。皆なだ。何時初めても好い。だが言ふて置くがね、今夜こそは、私の手練の程を眼に掛けますよ。奥様、今夜の茶は、この前のよりも強いですね。わつとグリヴェー様、貴方は何か、言はうとなさつたのだつけ

グリヴェー。私が。何か言はうと

ミシヨ。何か長い文句を、言ひ掛けなすつたやうだ。

グリヴェー。長い文句を。本當に。此奴は不思議ぢや。

ミシヨ。本當ですとも。ね、奥様、グリヴェー様は「眞實だ、かう言つても皆は信じまいが、如何に——」つて。

グリヴェー。「眞實だ、かう言つても皆は信じまいが、如何に」だと。皆なは信じまいが、如何にぢやと、いふや、臆わがない、些とも。

一同。(笑ふ)

グリヴェー。ミシヨ様、今度のも貴方の洒落なら、私は貴方に言ふとかにやならぬ。其洒落は良くないよ。

カミーユ。さあ、もう皆なだね。初めても良^{よろ}しいか（カラ／＼ミドミノの石をぶち擲^なける）

（短い間）

勝負をする人々。（混せて石を取る）

グリヴェー。ローラン君は勝負ないのだね。ちや、それならそれで嘴^{くちばし}を入れちや不可^{いけな}よ。さあ皆な、七つ宛^づとつた。もう好いよ、混^ませなくつてもミシヨール様、もう好いつたら（間）さあ、私から初めるぞ——ほうら、六六ぢや。

距離の仕^シ業^{ワザ}

（創作）

一、二、乙 山 本 正 己

場所は或る獨乙語講習會の一室、其處には若い學生や兀頭の老會社員やセルの袴の若殿や苦學生や御召羽織の商人躰やらが宛然生活の各方面を代表する展覽物でもあるかの様に群つて居た。その中に二十三四の婦人が——此の室には女性はこれ一人だつたが——居た。また若い學生連のうちに濕^ぬみをもつた黒眼勝ちの美しい青年が居た。彼は恒に無口であるとして恒に何物かを頭の中に拾ひ上げてこれを分拆したり總合して見たりして樂しんで居る様に見ゆる。彼があることの上に希望の鎖をたゞり、乍ら突進して居る瞬間、彼の顔の筋肉は上下左右に緊張して十五六の少年を見る様であるが、一度彼が暗黒を通して何物かを探り出さんとする様に悲哀の鬨に立つて盲動の零圍氣中を凝視して居るときは彼は實際よりは二つ四つ位老^おけて見えた。——